2002年3月1日

セミナー通信　Ｖｏｌ．９５　西村セミナールーム

主宰　西村　和彦

手取り足取り

うちの中１・中２の通塾日は週３日もあります。おそらく英数の２科目だけでなく５科目を指導してほしいと思われる方もいるでしょう。従来は時間割を組むことができないという理由もあったのですが、そうすることで塾生が５科目とも塾に頼ってしまうことに私は警戒感を持っていました。うちの塾の方針は「自分の力で考え、行動する、自立したひとりの人間のとしての成長を支援すること」であり、英数の勉強を通じて、他教科へも自分なりの勉強法をつかんでほしいと思っていました。

塾で英数をやり、試験などでよい結果を取れるようになってくると、それが自分の自信へとつながり、やがて「ほかの教科もできるようになりたい」と思い始めて理社国や実技教科もがんばるようになるのです。全員ではありませんが、ある程度のレベル以上の子であれば、この「できる喜び」が次のステップへの原動力になっていったものでした。

ところがこれが今や通用しなくなってきました。英数もできて、学年順位もかなり上位にいるにもかかわらず、定期テストの直前対策では社会の基本用語を覚えていなかったり、必ず出るとわかっている設問の復習さえしないまま当日のテストに臨む有様です。一昔前に、大卒の社会人が「指示待ち世代」とか「マニュアル世代」という言葉で揶揄されたことがありました。彼らは、創造性がなく、言われたことしかやらないというもので、それらは「詰め込み式の管理教育」が原因とされ、その結果「個性を重視したゆとり教育」なるものが幅をきかせる要因となってきました。

では、その「ゆとり」指向の中で小学校時代を過ごしてきた今の生徒に自主性が備わってきたかというと、全く正反対に事態は動いていると私は思います。指示やマニュアルのない中で、彼らは何もしない自由だけを満喫しています。必ずやってほしいことでさえも平気で「やりたくない」と言い切ってしまいます。この世代が世の中にでる頃は何と呼ばれるのか楽しみでさえあります。

こうした現状を目の当たりにして、私にとっては残念なことですが、英数ばかりでなく理社国の家庭学習についても、もう少し口を出していくことを現在考えております。これは全員を対象にはできませんので、指定中学の進度に合わせた内容で、４月以降、希望者のみの参加となる予定です。詳しくは後日ご案内いたします。